

堂ヶ嶋遺跡 上 妻遺跡  
法 元遺跡 童子丸遺跡  
石 貫遺跡

妻北地区下水道敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書II

2006

宮崎県西都市教育委員会

## 序

古く、日向国を中心地であった西都市には多くの文化財が分布しております。これらの貴重な文化財を後世に伝えるのは我々の責務であり、本市では文化財の保護、活用に努めてきていますが、各種の開発事業によって影響を受ける埋蔵文化財・遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

西都市教育委員会では、平成17年度公共下水道事業に伴い、西都市大字三宅、童子丸、右松所在の堂ヶ嶋遺跡、童子丸遺跡、上妻遺跡、法元遺跡、石貫遺跡の発掘調査を行いました。本書は、その遺跡調査概要報告書です。

今回の調査では竪穴住居跡やそれに伴うカマドの痕跡、掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴掘方、土地区画と考えられる溝状造構、それに伴う古代の土器破片・瓦・漁労具が出土しました。

また、墳丘の消失した円墳の周溝も確認され、そこからは土師器と須恵器の破片が出土しました。

今回の調査により得られた成果は、西都市の古代を理解するためには極めて重要なものです。

本報告が学術的な研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一助となれば幸いです。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた、西都市都市計画課、宮崎県教育庁文化課、また発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成18年3月20日

西都市教育委員会  
教育長 三ヶ尻 茂樹

## 例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が西都市都市計画課下水道係の委託を請け、平成17年度実施した妻北地区に所在する遺跡の調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、平成17年7月1日から平成18年2月13日まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 発掘調査は、1区の一部、2区の一部、3区、4区、5区、B区、C区を養方政幾、1区、2区、5区の一部、6区、A区、B区の一部、C区の一部、D区を津曲大祐が担当した。
5. 発掘調査及び図面作成は、養方・津曲が行い発掘調査者全員で補助した。
6. 遺物の実測は養方・津曲が行い、遺構・遺物の浄書は養方・津曲が行った。
7. 本書の執筆は第I、II章を津曲が、第III、IV章を養方・津曲が行い、編集は津曲が行った。
8. 本書に使用した方位は、岸標北（G. N.）と磁北（M. N.）である。
9. 本書に使用した標高は、海拔絶対高である。
10. 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帳』に準拠した。
11. 調査地点は調査年度－調査区名－調査地点番号で記号化した。また、起債事業の路線名は補助事業と区別するためにアルファベットで示した。
12. 本書に使用した遺構記号はSA（堅穴住居跡）、SB（掘立柱建物）、SC（土坑）、SD（土壙墓）である。

## 目 次

第Ⅰ章	序説		第Ⅲ章	各遺跡の調査	.....	6
第1節	調査に至る経緯	2	第1節	平成17年度調査区の設定と概要	.....	6
第2節	調査の体制	2	第2節	遺構と遺物	.....	6
第Ⅱ章	遺跡の位置と歴史的環境	3	第Ⅳ章	小結	.....	18
第1節	立地	3		報告書抄録	.....	23
第2節	歴史的環境	3				

## 挿図目次

- Fig 1. 周辺遺跡分布図 (1/25,000)  
Fig 2. 調査区位置図  
Fig 3. 1 - 14・C ~ D 地点遺構分布図及びSD 1 実測図 (1/200・1/40・1/4)  
Fig 4. 2 - 9 地点実測図 (1/40)  
Fig 5. 2 - 10・11 地点実測図 (1/100)  
Fig 6. 2 - 35 地点実測図・土層図 (1/100)  
Fig 7. 2 - 9・10・11・35 地点位置図 (1/5,000)  
Fig 8. 2 - 11 地点出土遺物実測図 (1/3)  
Fig 9. 3 - 1 ~ 7 地点位置図 (1/2,000)  
Fig 10. 3 - 6 地点SA 1 出土遺物実測図 (1/40)  
Fig 11. 3 - 5 ~ 7 地点遺構分布図及び 3 - 6 地点出土遺物出土状況実測図 (1/200・1/40)  
Fig 12. B - 6 ~ 11 地点位置図 (1/2,000)  
Fig 13. B - 6・7 地点実測図・土層図 (1/200・1/80)  
Fig 14. B - 6 地点消失円墳周溝内出土遺物実測図 (1/4)  
Fig 15. B - 22 地点実測図・土層図 (1/100)  
Fig 16. B - 25 地点実測図・土層図 (1/100)  
Fig 17. B - 26 地点実測図・土層図 (1/100)  
Fig 18. B - 22・25・26 地点出土遺物実測図 (1/3)  
Fig 19. B - 22・25・26 地点位置図 (1/5,000)  
Fig 20. C - 2 ~ 6 地点位置図 (1/2,000)  
Fig 21. C - 2 ~ 6 地点実測図・出土遺物実測図 (1/200・1/4)

## 図版目次

- PL 1 1. 1 - 8 地点  
2. 1 - 14 地点土壤基  
3. 2 - 9 地点掘削状況  
4. 2 - 9 地点穴掘方  
5. 2 - 10 地点SA 検出状況  
6. 2 - 10 地点土層図  
7. 2 - 10 地点掘削状況  
PL 2 1. 2 - 11 地点SA 2  
2. 2 - 11 地点SA 2 士器埋設炉  
3. 2 - 11 地点SA 1 カマド跡  
4. 2 - 35 地点溝状遺構検出状況  
5. 2 - 35 地点溝状遺構  
6. B - 22 地点SA 1 土器出土状況  
7. B - 26 地点SA 1  
8. B - 26 地点カマド跡  
PL 3 1. 3 - 1 ~ 7 地点遺構掘削前状況  
2. 3 - 3 地点遺構検出状況  
3. 3 - 6 地点遺物出土状況  
4. 3 - 7 地点遺構検出状況  
5. 3 - 7 地点埋甃検出状況  
6. B - 7 地点消失円墳周溝土層  
7. B - 6 地点消失円墳周溝検出状況 (内側)  
8. B - 6・7 地点消失円墳周溝検出状況  
PL 4 1. B - 3 地点遺構検出状況  
2. B - 4 地点遺構検出状況  
3. C - 1 - 12 地点遺構掘削前状況  
4. C - 2 地点遺物出土状況  
5. C - 4 地点遺構検出状況  
6. C - 4 地点遺物出土状況  
7. C - 5 地点遺構検出状況  
8. C - 5 地点遺構・遺物出土状況

# 第Ⅰ章 序 説

## 第1節 調査に至る経緯

当地区に所在する遺跡の発掘調査については、妻北下水道敷設事業に伴い実施したものであり、平成16年度事業からの継続事業である。内容は現在、市道、県道として利用されている道路に下水道管を敷設する工事で、工事区域に隣接して西都原古墳群の支群や日向国府跡が所在し、周辺地での埋蔵文化財調査例が多くあるため、事業主である西都市都市計画課と協議した結果、遺構・遺物が出土した場合の現状保存が困難であると判断し、記録保存を目的とした本調査を実施した。

## 第2節 調査の体制

事業主体 西都市役所 都市計画課 下水道係

調査主体 教育長 三ヶ尻 茂樹  
文化課長 伊達 博敏  
同 補佐 村岡 満徳  
同 係長 緒方 政幾  
同 主査 重永 浩樹  
同 主事 篠瀬 明宏

調査担当 同 係長 緒方 政幾  
主事 津曲 大祐

調査指導 日高正晴（西都原古墳研究所長）

発掘作業 緒方タケ子、黒木トシ子、児玉征子、篠原時江、関治代、長谷川クミエ  
浜田スミ、疋田はる子

整理作業 奥野和子、狩野由美、中原昭美、奈須眞紀子、長谷川明美

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 立地

本調査区は、宮崎県西都市の中心に位置する。現在の西都市街地からは直線距離にして約1kmである。

九州山地から東に伸びる丘陵が一つ瀬川により浸食され流域に沿い沖積平野を形成し、その平野を挟んで洪積世台地が南南東に伸びる。一つ瀬川からみて西側が国特別史跡西都原古墳群の広がる西都原台地である。本調査区は西都原台地の東側から南東に広がる中間台地で、標高は約20mの位置にあり、西都原台地との比高差は約30mである。

このように当地域の地形は九州山地から伸びる丘陵が河川の浸食により形成された平野と八つ手状に伸びる洪積世台地から成り、その台地上や台地縁辺に遺跡が集中するといった特徴がある。

### 第2節 歴史的環境

西都原台地上を中心に縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が所在する。

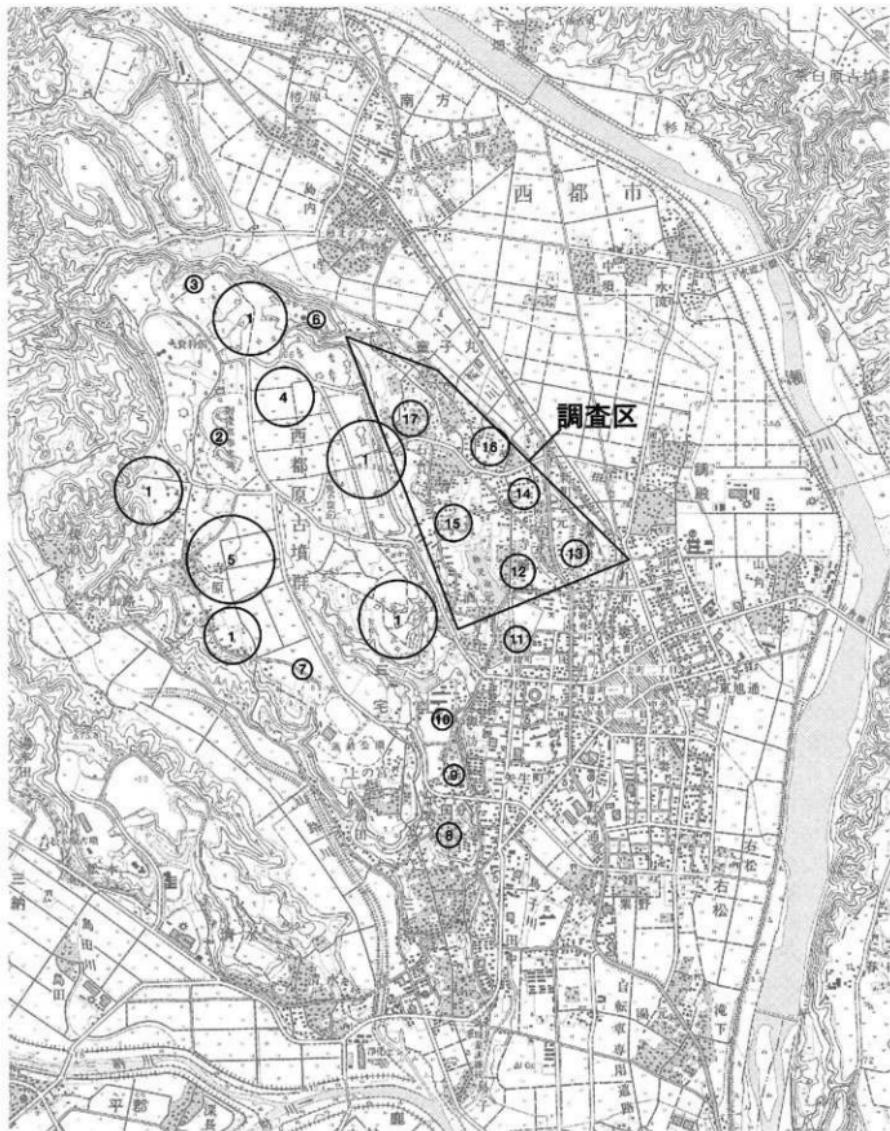
主要な遺跡を概観すると、まず台地上の東西4.0km、南北2.0kmの範囲に広がる国指定特別史跡・西都原古墳群があげられる。古墳時代前期から終末期までの古墳群であり、その構成の通時性と同時期における多様性、良好な遺存状況は稀有の事例であり、宮崎平野部の古墳時代を理解する上で最も多くの情報を持つものである。

この西都原台地は古墳群により有名であるが、その台地の北西端には縄文時代早期の集石遺構が確認され、台地中央部には縄文時代後・晚期、弥生時代中期～後期前半の住居跡が確認されており、古墳時代以前から当地域の生活遺構が所在する。また台地東北端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落である新立遺跡があり、台地南端部の寺原地区には古墳時代の集落が所在することが予想される。

また、台地の東側から南東側にかけて、約30m下った標高には中間台地が広がっており、遺跡が集中する。その中間台地の北側に位置する寺崎地区には日向国府跡、南東側に位置する国分地区には日向国分尼寺跡（推定）、南に日向国分寺跡が所在する。その他、西都原古墳群の支群も点在し、堂ヶ崎地区、国分地区においては平成12～13年度に地下式横穴墓群も調査された。同地域内である童子丸地区、刎田地区を中心にして6～7世紀以降の住居跡も多く確認されることから、当地域は複数時期に渡り墓域や集落として利用されて現在に到る広域の複合遺跡として評価することができよう。これらの地区を中心とした周辺遺跡の調査と成果は堂ヶ崎第2遺跡<sup>(註1)</sup>の調査報告書に詳細にまとめられているため参照されたい。

前述したように本調査区もこの中間台地であり、今年度の調査の中心は日向国府跡の北西側と西側にあたる地区で堂ヶ崎遺跡・上妻遺跡・法元遺跡・童子丸遺跡・石貫遺跡が該当する。国府関連施設の一部や同時期の集落などの手がかりが得られる可能性とともに古墳時代に遡る遺構が多く確認される可能性がある。

調査は下水道管理設部分のみを対象とするため、狭く長いものになり、個々の地点で検出された遺構、遺物の性格を決定づけるに十分でないが、調査地点が広範囲にわたるため、各地区における遺構、遺物出土状況から複合遺跡内をさらに色分けする根拠を得ることができるものと考える。



1. 西都原古墳群 2. 御陵墓（男枝塚・女枝塚） 3. 丸山遺跡 4. 西都原遺跡 5. 寺原遺跡  
 6. 原口第2遺跡 7. 原口第1遺跡 8. 日向國分寺跡 9. 國分遺跡 10. 日向國分尼寺跡  
 11. 酒元遺跡 12. 寺崎遺跡（日向國府跡） 13. 上妻遺跡 14. 法元遺跡 15. 童子丸遺跡  
 16. 童子丸遺跡 17. 石貫遺跡

Fig 1. 周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)



Fig. 2. 調査区位置図

## 第Ⅲ章 各遺跡の調査

### 第1節 平成17年度調査区の設定と概要

#### 1. 調査区の設定

平成17年度の調査区は下水道敷設工事の工区に沿って設定した。全工区において本調査をおこなった。各調査区の位置関係と調査区番号はFig 2に示した。総延長2,928.3m、総調査面積は2,629.5m<sup>2</sup>である。

#### 2. 調査の方法

調査は協議の結果、作業の安全性を考慮し、幅約0.8m～1m、現地表面から約1mまでの深さを対象にする。調査対象の下水道敷設路線が現在道路であるため、周辺地住民の生活に及ぼす影響を最小限に抑える必要があることから、調査は基本的に1日で完結する形態をとった。そのため、1日に進む延長は1日で調査を終了し、埋め戻しが完了して現況に復旧できる範囲となり、約10mごとを基本単位として調査に臨むこととなった。しかし、遺構や遺物が集中して複数日調査が必要な場合は鉄板で仮復旧して調査を継続する。逆に後世の削平等で遺構が残っていない地点については復旧が可能な範囲で調査延長を延ばした。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 1区の調査 (Fig 2)

##### A. 遺跡の現況

本調査区は童子丸遺跡と石貫遺跡である。1工区の調査前の現況は、アスファルト舗装された市道291号・278号で、調査区内外では最も広い道路である。総延長526m、面積475.4m<sup>2</sup>である。掘削前に目に見える遺構は残っていない。周辺に西都原古墳群の支群が点在することから重機で慎重に舗装路盤を剥ぎ、一部深く掘削し基本層序を把握して、遺物等の有無を確認しながら調査を進めた。

##### B. 遺構と遺物 (Fig 3)

1-1～12・15・16地点：路盤の下には客土と厚い黒色泥層が堆積していた。旧河道もしくは河道沿いの湿地帯であったと考えられる。

目立った遺構はなく、時期のはっきりしない溝状遺構を検出した。

1-17～25地点：市道278号上にあたり、幅員が狭い。20地点までは削平が著しく遺構はなかったが、21地点、24地点で竪穴住居跡らしき堀方を検出した。

他に溝状遺構と考えられる堀方を検出したが全体像は不明である。

1-14・C～P地点：市道291号で、294号が合流した地点から北に延びた道路である。この地点周辺には日向神話にまつわる伝承地の「無戸室の跡」や「児湯の池」、さらに、その北西には「石貫神社」が所在する。14地点から短辺側面と底面に配石が施された土壙墓1基、C～F地点にかけて竪穴住居跡4軒等を検出した。SD 1は全体の1/3程度の検出であり、長辺（北辺）1.5m・短辺（東辺現存長）0.6m、検出面からの深さ0.42～0.47mを測る。短辺側面には20cm前後、底面には25cm前後の平たい石が配されており、底面には炭化物（土層断面には炭化物の層）が確認できた。竪穴住居跡は、いずれも方形プランと思われ、E地点のものはカマドを有している。時期は7世紀に比定される。F地点から検出面が

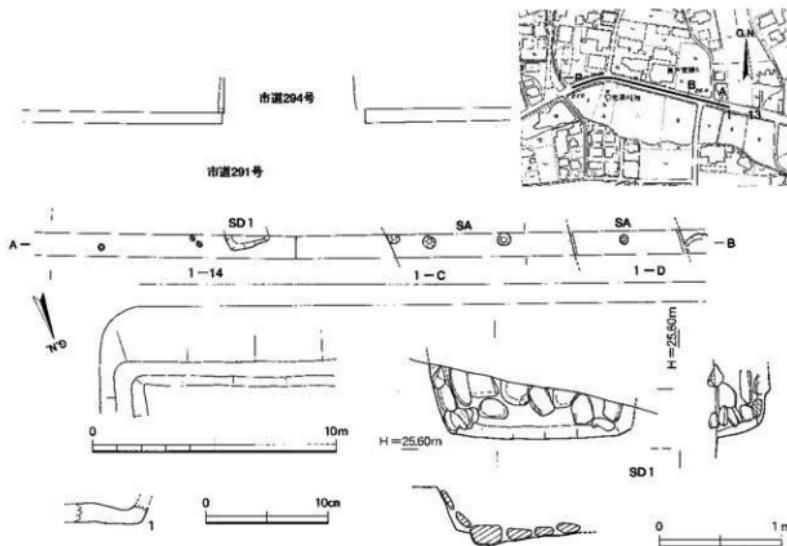


Fig 3. 1-14・C~D地点遺構分布図及びSD 1実測図 (1/200・1/40・1/4)

徐々に深くなり丁地点では1.2m以上になり、ここから北(K~P地点)は急に落ち込み、泥層となり水が湧き出ることから、旧河道か湿地帯と思われる。

**出土遺物**：遺物は堅穴住居跡を検出したC~F地点を中心とし土師器・須恵器・陶磁器・石器等が出土している。主体を成しているのは土師器で、器形としては壺・壺・壺・椀等がある。1は14地点出土の須恵器大甕の底部である。

## 2. 2区の調査 (Fig 2)

### A. 遺跡の現況

本調査区は童子丸遺跡である。現況はアスファルト舗装した市道278、283号である。1区の市道291号から北側に入る市道で、中間台地の縁に向かう。地形は北側より次第に傾斜し低くなる。周囲には西都原古墳群の支群が点在し、調査区である市道は周辺地形よりも標高が約1m低い地点もあるため、道路敷設時に地形が削平を受けたことが予想できる地点もある。

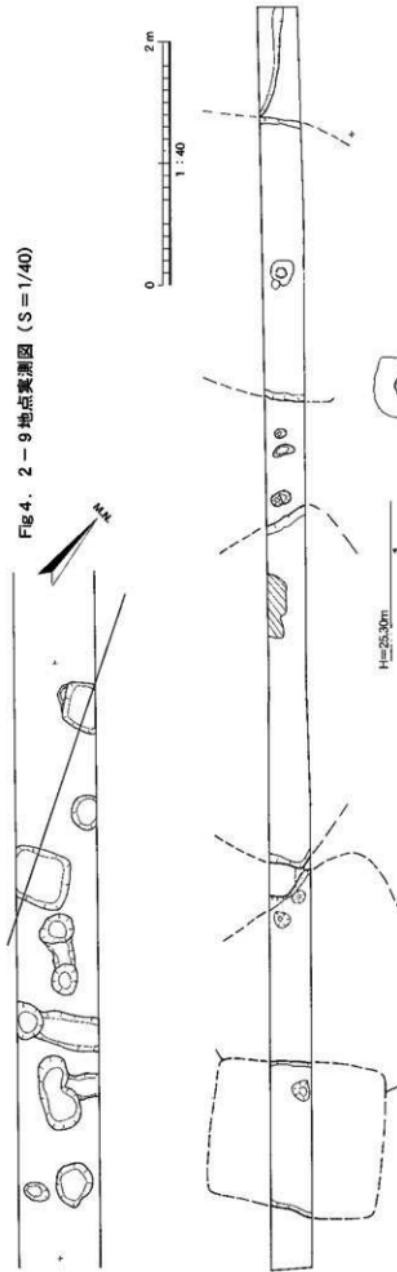
総延長は675.7mで、総調査面積は約608.1m<sup>2</sup>である。

### B. 遺構と遺物 (Fig 4・5・6・7・8)

2-1~3地点：1地点で近世の溝状遺構を検出した。2地点からは路盤を剥ぐとすぐに礫層にあたり、地層は削平されており遺構、遺物はなかった。

2-4~16地点：5・6地点で、端部間10.9mを測る堀方を検出したが性格は不明である。8・10・11地点では切り合う堅穴住居跡を少なくとも6軒確認した。9地点では掘立柱建

Fig 4. 2-9地点実測図 ( $S = 1/40$ )



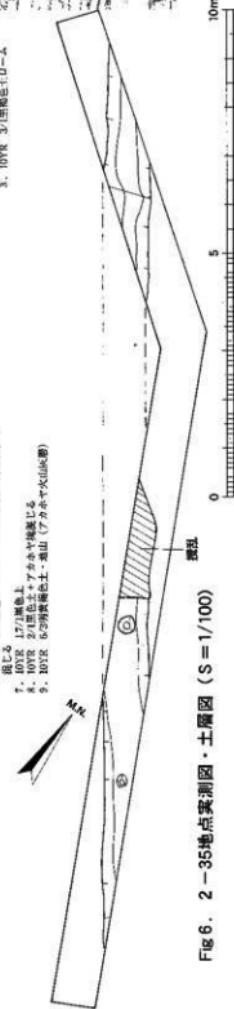
- 8 -

Fig. 5. 2-10·11地点実測図  
( $S = 1/100$ )



Fig. 6. 2-35地点実測図・土層図 (S=1/100)

Fig. 7. 位置圖 ( $S=1/5000$ )



物を構成すると考えられる柱穴堀方を検出し、12地点では溝状遺構を検出した。地層も比較的良好に残っており、調査区内でも最も多く遺構が検出できた箇所である。

9地点では方形の柱穴堀方で径45cm、深さ40cmを測るものと二基検出した。それから建物の軸を想定するとはば磁北を向く。10地点と11地点で検出した竪穴住居跡は隅丸方形の平面形でSA 1・2が約 $5 \times 5$ m、SA 3が $3 \times 3$ mを測り、深さを土層で確認すると45cm～60cmである。SA 1は10～11地点にかかるて検出され11地点でカマド跡が確認された。SA 3がSA 2を切る形で造られている。11地点ではもう一軒竪穴住居跡(17-2-11SA 2)が検出され、堀方間5.8mを測り、深さ約30cmである。中央に地床炉(土器埋設炉)が検出できた。

2-17地点：市道286号上で16-2-10地点からの延長にある。地形が削平されており、路盤下はすぐに礫層にある。遺構・遺物はない。

2-18～26・35地点：遺構が検出され始めるのは19地点からで、20地点にかけてピット群が検出された。2棟の掘立柱建物が建つ可能性がある。23地点では竪穴住居跡と考えられる堀方を検出した。3軒が切り合っていると考えられ、深さは約20cm程度である。24地点では幅3m、深さ70cmを測る大溝を検出した。性格は不明であるが、今後周辺遺構との関係を意識する必要があろう。

25～26地点にかけては削平が著しく遺構・遺物はなかった。

35地点では検出面において幅1mを測る溝状遺構を検出した。埋土内からは土師器・須恵器等が出土し、堀方からもしっかりした溝である。さらに北西側に向かって伸びており、土地区画などを意図し掘削されたもの可能性があり、周辺に所在する遺構に注意が必要である。

出土遺物：1は17-2-11SA 2出土の土師器・甕で、肩～口縁部を欠損する。地床炉として住居の床に埋設して使用したものである。上部には赤化した部分があり、二次的な被熱によるものであろう。底部も丸みを帯びた全体的に球形の甕で、胴部最大径24.3cmを測る。

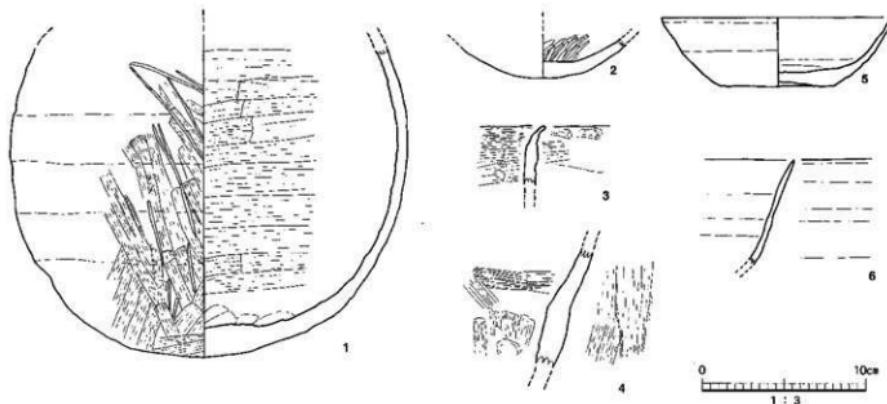


Fig. 8. 2-11地点出土遺物実測図 (S=1/3)

調整は全体的に粗く、外面を粗い縦方向の工具ナデ、複数の条痕状の線が部分的に縦に施される。内面は工具ナデが横に施され底部付近のみ縦ナデで仕上げられる。胎土は非常に粗く、多くの褐色・褐灰色砂粒や長石が混じる。2は土師器の坏底部破片で、丸みのある底部を呈し、外面は摩滅が著しいが内面はミガキで仕上げられる。胎土は精良である。3は小型の壺口縁部破片で、非常に粗い胎土である。4は壺の底部付近破片と考えられる。非常に粗い胎土で、砂粒が多く混じる。5は、SA 1出土の壺で底部を回転ヘラ切りで仕上げる。摩滅が著しい。6は土師器梶の口縁部破片で、胎土は精良で褐色粒が混じる。

17-2-27~34地点：童子丸神社から北に延びる市道278号で、全体的にアカホヤ火山灰層は遺存しておらず、南側のみ一部分確認できた。地形的には27地点が傾斜地、28地点から平坦になっている。柱穴をわずかに検出したのみで、遺物はほとんど出土しなかった。

### 3. 3区の調査 (Fig 2)

#### A. 遺跡の現況

本調査区は、国道219号から法元地区に向かって北西に延びた市道301号内で、昨年度3工区とした地点（16-3-7～14地点）の北側に位置している。南西約25.0mには西都原古墳群第259号、南東約50.0mには西都原古墳群第260号が所在している。総延長は67.0mで、

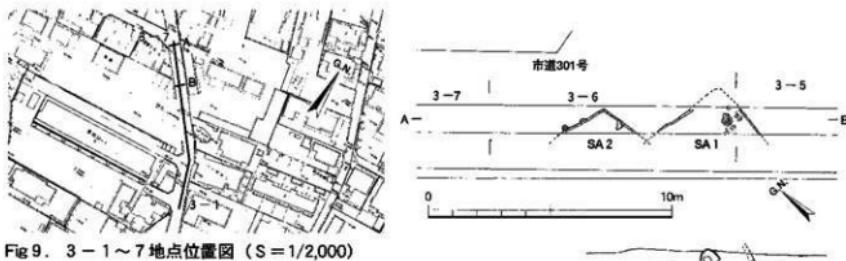


Fig. 9. 3-1～7地点位置図 (S = 1/2,000)

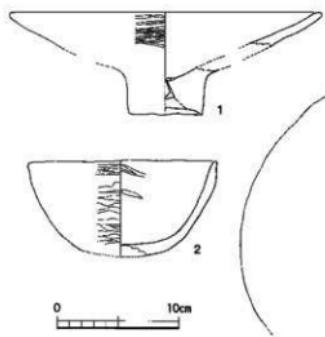


Fig. 10. 3-6地点SA 1出土遺物実測図 (S = 1/4)



Fig. 11. 3-5～7地点遺構分布図  
及び3-6地点遺物出土状況実測図  
(S = 1/200・1/40)

調査面積は67m<sup>2</sup>である。なお、本年度調査始点となったところの南側に隣接した地点（昨年度調査16・3・12～14地点）には推定墳丘径26.2mの円墳（葺石有り）を確認しており、西都原古墳群第259墳はこの検出した円墳が小さくなっているものである可能性が高いと判断した。

この市道を隔てて東側が法元遺跡、西側が堂ヶ鳩遺跡となっている。

#### B. 遺構と遺物 (Fig 9・10・11)

3～1～7地点：現在の地形は平坦であるが、もともとは谷状になっていたようで、アカホヤ火山灰層面が徐々に深くなり4～7地点では1.3～1.7mを測る。谷を埋めた盛土には多量の土器小片が混入しており、周辺地域にはかなりの遺構・遺物が遺存している可能性が高い。

6地点から竪穴住居跡2軒を検出した。いずれも、方形プランと思われるが、その中の1軒はカマドを有している。規模等は不明である。7地点では、埋甕（土師器）が出土したが、残念ながら竪穴住居跡のプランを確認することはできなかった。

出土遺物：6～7地点を中心に土師器が出土している。1・2は6地点の住居跡内出土の土師器台付浅鉢で、同一個体と思われる。丁寧なヘラ磨きで両面が調整された丹塗り土器で、口径25.6cm・底径6.0cmを測る。3は土師器椀で、底部が欠損している。口径15.4cm・推定器高7.8cmを測る。丸底の底部から内湾しながら口縁部に至っている。丁寧なヘラ磨き調整が施された丹塗り土器である。4は7地点の住居跡から出土したもので、口縁部は短くわずかに外反した土師器壺である。胴部は丸く膨らむ。口径12.1cmを測る。

### 4. 4区の調査 (Fig 2)

#### A. 遺跡の現況

4区は、堂ヶ鳩遺跡の北部、市道301号と291号が合流した地点の西側、東西に延びた市道295号の東側部分である。総延長約107.0mで、調査面積は96.3m<sup>2</sup>である。地形的には西側から東側に向かって傾斜しており、その比高差は約2.00mを測る。8～10地点は、両側に畠地が広がっており、道路部分は一段高くなっている。

#### B. 遺構と遺物

4～1～7地点：調査の結果、アカホヤ火山灰層は遺存しておらず、また、道路中央部分には水管が通っていることから、かなり掘削されており、ほとんどの地点が調査不可能であった。

4～8～10地点：8～10地点は、地盤がかなり深く、8地点で約1.2m、9地点では約2.22m（重機で確認）、10地点では約1.0mを測る。現地形は平坦であるが、もともとは河道であったと思われる。現在はこの畠地の両側に水路があり、北の右貫地区から湧水が流れている。

### 5. 5区の調査 (Fig 2)

#### A. 遺跡の現況

本調査区は法元遺跡である。5区は、稚児ヶ池西側に位置した狭幅の市道364号である。地形的には平坦で、標高は21.5m前後であるが、西側が一段高く、居住地域となっている。総延長約64.0mで、調査面積64.0m<sup>2</sup>である。

## B. 遺構と遺物

5-1～6地点：1地点は道路中央部に水管が通っており、調査不可能であり、2地点も同様なことから、この2つの地点については来年度下水道工事に合わせて調査することになった。3～6地点については検出面が浅く、水管が両側に片寄っていることから調査可能であった。結果、アカホヤ火山灰層は全く遺存していなかったものの、6地点で土坑を検出したが、共伴遺物に乏しく、時期的なことは不明である。

## 6. 6・D区の調査 (Fig 2)

### A. 遺跡の現況

調査区は上妻遺跡になる。国道219号より東側になり、中間台地の東端部に当たる。式内社である都萬神社が鎮座する周辺になる。6区が総延長140m、総面積126m<sup>2</sup>、D区が総延長37.6m、総面積33.84m<sup>2</sup>である。

### B. 遺構と遺物

6-1、4地点：市道311号上で、台地から下る路線である。4地点では遺物包含層が検出できたが、造成時の客土であった。東側に下ると地形が落ちており、地層は残らないことから、部分的に掘削を行い、土層を確認するに留めた。路盤下は疊層である。遺構はなかった。

6-2、3地点：都萬神社の北側にある枝線で、上層は削平されていたが、3地点において、ピットや土坑を確認した。土坑は0.9×0.5mを測り、底面に礫を敷いていた。

D-1地点：国道219号から入る枝線で、8mほどの調査であるが、土坑を検出した。後世の搅乱が多く、遺構ははっきりしないが、地山は良好に残っていた。

D-2地点：都萬神社の南側にあたり、造成時に盛土されており、遺構・遺物は確認できなかった。

## 7. A区の調査 (Fig 2)

### A. 遺跡の現況

本調査区は1～3・6～9地点が童子丸遺跡、4・5地点が法元遺跡にあたる。複数の短い枝線に分かれている。総延長236.9m、面積236.9m<sup>2</sup>である。

### B. 遺構と遺物

A-1～3、8～9地点：1地点で溝状遺構を検出したがしっかりした堀方ではなく、はっきりしない。

2～3、8～9地点は道路敷設時に土地が削平されており、遺跡が残っていなかった。路盤下は疊層になる。

A-4～5地点：4地点で土坑1基、ピット1、溝状遺構1条、不明遺構1を検出した。特に溝状遺構は幅約1.3m、深さ55cmを測る。隣接して検出した不明遺構とともに、須恵器や土師器破片を多く出土した。

5地点ではピット群と竪穴住居跡を1軒検出した。住居跡の堀方ははっきりしなかったが、中央部の床面に地床炉（土器埋設炉）が検出できたため、土層観察により住居跡と確認できた。

A-6～7地点：6地点は水道管敷設による搅乱を受けていたが、7地点で搅乱を受ける

が、竪穴住居跡と考えられる遺構を検出した。カマド跡と考えられる粘土と焼土の混じるプランが検出できた。南側を備溝で切られ端部ははっきりしない。深さ約30cmの堀方で貼床が施されていた。

## 8. B区の調査 (Fig 2)

#### A. 遺跡の現況

本調査区は堂ヶ嶋遺跡である。現況はアスファルト舗装された市道である。下水道の枝線になり広範囲に位置している。市道301号と299号が合流した地点の西側周辺（稚児ヶ池保育園・県営住宅周辺）と稚児ヶ池西側周辺の道路等である。調査区の総延長は563.4mで、調査面積は501.6m<sup>2</sup>である。

#### B. 遺構と遺物 (Fig12・13・14・15・16・17・18・19)

B-1 地点：市道301号から入った枝線で、不明遺構が検出された。性格は分からぬが、埋土から遺物が少量出土した。

B-2～5地点：2～5地点は市道301号から西に延びた袋小路の里道である。地形的には平坦で、標高約22.5mである。短い距離であったにもかかわらず、5軒もの堅穴住居跡や柱

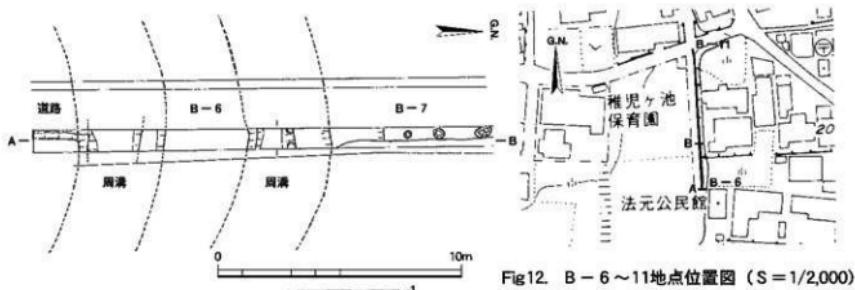


Fig12. B-6~11地点位置图 ( $S=1/2,000$ )

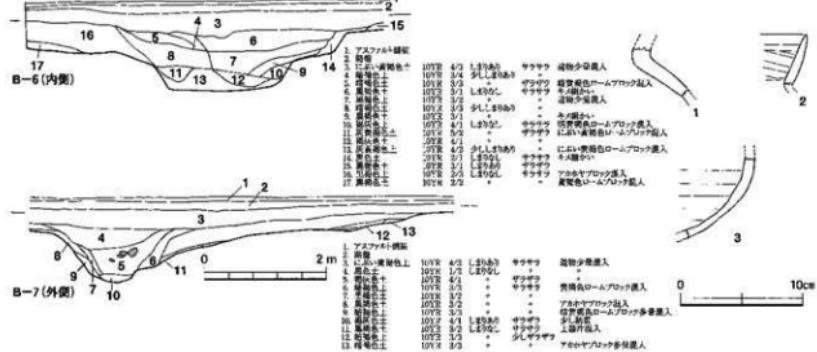


Fig.13. B-6・7地点実測図・土層図  
(S=1/200, 1/80)

Fig14. B-6地点消失円墳周溝内出土  
遺物実測図 (S=1/4)

穴等を検出した。3地点のSA 1は方形プランと思われるが、南東隅部分のみで、規模等については不明な点が多い。SA 2は南西隅と東辺で、一辺約3.2mの方形プランと推定される。

検出面の深さは0.12~0.15mを測る。4地点のSA 1は東辺と西辺、5地点のSA 1は北東隅と推定される。いずれも規模等については不明である。

B-6~11地点：西都原古墳群第260号の西側から法元公民館まで延びている市道300号である。6・7地点で消失円墳と思われる古墳の周溝を検出したが、これらは並行していることから二重周溝と思われる。いずれも、南側が急で、北側が緩やかに傾斜している。6地点の周溝は幅3.7m・検出面からの深さ0.94m、7地点の周溝は幅4.0m・深さ0.85mを測る。その他、柱穴や溝状遺構を検出した。これらは時期的には不明な点が多い。

出土遺物：全体的に遺物は少ない。周溝内も遺物は少なく、陶器片や格子目の古瓦などが混入しており、確実に時期を特定できるものに乏しい。1は土師器壺の頸部で、表面はタテハケ、内面はヨコハケ調整が施されている。2は須恵器短頸壺の口縁部で、表面には自然釉が付着している。内面は回転ナデ調整が施されている。3は須恵器壺の底部に近い胴部で、表面上部分はヨコハケ、下部分は回転ナデ、内面は回転ナデ調整が施されている。

B-12地点：市道301号と299号の合流地点から西へ65.0m、北西に延びた短い単道である。調査の結果、旧河道の右岸と思われる地形を確認した。

B-13~21地点：市道301号と299号の合流地点から西へ40.0m、南北に細長く延びた里道である。ここでは左岸（17-B-12地点で確認した旧河道の対岸）と思われる地形を確認した。

B-22~28地点：市道366号で、地層の残る工事起点から約51mの地点から調査を始めた。22地点では古墳時代の竪穴住居跡と考えられる堀方を検出し、埋土中から小型丸底壺を含む、土師器破片が出上した。23地点にかけて不明遺構を検出し、24地点では掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴堀方を検出した。25地点では竪穴住居跡1軒を検出した。推定で一辺約5m、深さ約30cmの堀方である。26地点では竪穴住居跡2軒を検出した。一辺約3m、深さ約10cmのものと、もう1軒は一辺約4.8m、深さ約20cmを測り、カマド跡を伴う。土師器、須恵器破片が多く出土した。22地点のみ古墳時代の遺構で、他は奈良・平安時代に下る。

B-29・30、56~58地点：市道299号上で29、30地点、56、57地点はもともと谷状の地形で自然の流路であったと考えられ、黒色泥層が堆積し、上層は道路敷設時の客土に覆われており、遺構・遺物はなかった。58地点のみ、地山が残り、竪穴住居跡と考えられる堀方が2軒検出できた。切り合いにより範囲は不明確だが、堀方の深さは約20cmをはかり、遺物の出土はほとんどない。

B-53~55地点：市道365号で、53地点では礫が多く入る正確不明の堀方を検出した。深さは検出面より約30cmで、遺物が多く混じる。54地点はアカホヤ火山灰層の上に平安時代の遺物包含層が堆積していた。ピットが検出できた。55地点ではやはり遺物包含層があり、溝状遺構とピットが多く検出できた。溝状遺構は幅1.3mで2段の堀方で深さ約30cmを測る。

出土遺物：1はB-22地点出土の小型丸底壺である。口径8.6cm、頸部径6.5cm、胴部最大径8.3cm、口縁部高3.4cm、胴部高5cmを測る。外面に赤色塗彩され、黒班があり、胴部上半は継ミガキ、下半と口縁部は横ミガキで仕上げられる。内面は胴部が横ナデ、口縁部が横ミガキされる。胎土は精良で雲母が多く混じる。2は複合口縁壺の口縁部破片と考えられ、

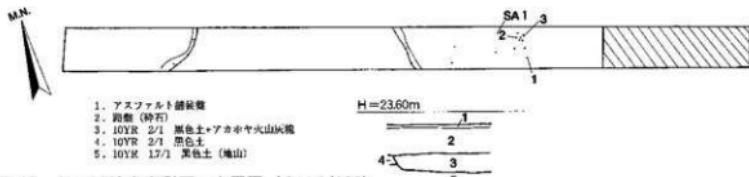


Fig. 15. B-22地点実測図・土層図 ( $S = 1/100$ )

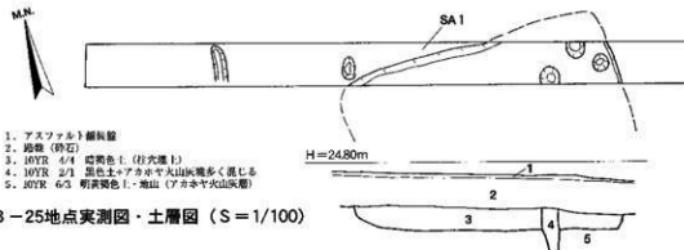


Fig. 16. B-25地点実測図・土層図 ( $S = 1/100$ )

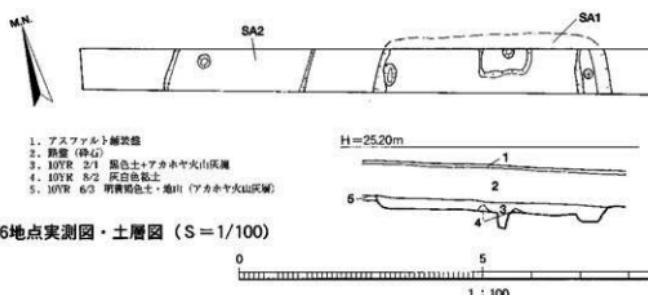


Fig. 17. B-26地点実測図・土層図 ( $S = 1/100$ )

0 5 10m  
1 : 100

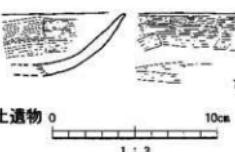


B-22 SA1



Fig. 19. B-22・25・26地点位置図 ( $S = 1/5,000$ )

Fig. 18 B-22・25・26地点出土遺物実測図 ( $S = 1/3$ )



底面に接合痕がある。復元で径17.7cmを測る。胎土は細かい褐色粒が多く混じる。3は高坏の脚裾部破片で、裾部径を復元で12.4cm、精良な胎土である。4は、B-25地点SA出土の土師器椀底部破片である。高台裾径7.2cmを測り、精良な胎土。5はB-26地点SA1出土土師器甕底部で、底部径8.4cmを測る。胎土は非常に粗く、二次的な被焼の痕跡がある。6は須恵器椀の底部で、外に張り出す高台が付く。高台裾径が7.4cmで焼成は良い。外面底部を回転ヘラ削り、内面底面に磨痕があり、転用硯と使用されたものであろう。

7土師器皿である。精良な胎土で、器面を工具ナデで仕上げる。

## 9. C区の調査 (Fig 2)

### A. 遺跡の現状

C区は、市道301号と国道219号に挟まれた法元遺跡内で、3区を除く対象道路すべてである。総延長510.7m、調査面積は420.36m<sup>2</sup>である。地形的には平坦で、ほとんどが住宅街に位置する道路である。

### B. 遺構と遺物 (Fig20・21)

C-1~12地点：市道301号内3区の北側から市道291号と合流するまでの地点である。2地点から9地点まで、1地点に2~3軒、多いところでは4軒（4地点・5地点）もの堅穴住居跡が重複しており、その総計は16軒にも及ぶ。カマドを有するタイプのものを4軒、埋甕を有するタイプのものを1軒検出している。プラン的にはほとんどが方形を呈していると思われる。

出土遺物：各地点から多くの遺物を出土しているが、主体を成しているには土師器で90%以上を占めている。器形的には甕・壺が多く、その他、鉢・椀・高坏等が出土している。1・2は2地点SA2出土のもので、1は土師器高坏で、低く短い脚部から内湾しながら立ち上がって口縁端部に至っている。坏部は両面とも丁寧なヘラ磨き調整、脚部はタテナデ及びナデ調整が施されている。推定口径18.8cm・脚裾径10.4cm・器高10.2cmを測る。2は土師器椀で、表面口縁部はヨコナデ、胴部から底部にかけてと内面は丁寧なヘラ磨き調整が施されているが、風化が著しく調整の単位がはっきりしない。3・4は3地点SA出土のもので、3は脚裾径10.6cmの土師器高坏、4は土師器鉢である。5は4地点SA出土の須恵器坏身で、口径12.7cm・底径7.7cm・器高3.3cmを測る。ヘラ切り底で、両面回転ナデ調整である。6~9は7地点のSAから出土したもので、6は両面丁寧なヘラ磨き調整が施された土師器椀の口縁部、7はヨコナデ調整が施された甕の口縁部、8はヘラ切り底で両面回転ナデ調整が施された土師器鉢で底径11.4cmを測る。9は底面に木ノ葉痕及び底部に指圧痕が遺存し、底径11.8cmを測る土師器甕の底部である。

C-13~16地点：県営住宅東側の市道301号から北に延びる里道である。16地点で堅穴住居跡1軒と柱穴2個を検出することができた。遺構検出面はアカホヤ火山灰層で、SA1は西辺と思われる部分を確認した。検出面からの深さ0.2mを測る。遺物量が少なく、時期的なこと等不明な点が多い。

C-17~26地点：市道309号の法元簡易郵便局から北に延びる市道304号である。調査区の両側に水道管が埋設されており、調査に苦慮したが18地点で堅穴住居跡、23地点で埋甕が出土した。18地点のSA1は一辺約3.8mの方形プランと推定される。23地点では狭い幅であったため、残念ながらプランを確認することはできなかった。

C-27~32地点：市道305号の南側部分である。西側に水管が埋設されているものの、2/3が調査可能であったが、アカホヤ火山灰層は遺存しておらず、遺構等を確認することはできなかった。

C-33~38地点：市道308号上である。本地点でもアカホヤ火山灰層は遺存しておらず、遺構等も確認できなかった。

C-39~42地点：市道305号の27地点から東に延びる私道である。42地点で円形及び方形土坑を検出したが、遺物が共伴しておらず時期的なことは不明である。円形土坑は径0.6m・深さ0.6m、方形土坑は一辺0.9m、深さ0.25mを測る。

C-43・44地点：市道305号の中央部から西に延びた袋小路の里道である。アカホヤ火山灰層は遺存していないが、柱穴と溝状遺構を検出した。時期的なことは不明である。

C-45・46地点：市道306号上で、周辺調査区からは遺構が確認できなかったが、この路線においては竪穴住跡と考えられる遺構が3軒検出された。2軒は切合った状態で検出したため規模ははっきりしないが、1軒は単独で検出でき、幅3.65cmを測り、深さ40cmのしっかりした掘り方である。埋土の中から土師器・須恵器・陶磁器・石錘等が多く出土した。時期は9世紀後半~10世紀前半にあたり、日向国府跡の時期と併行するため、注目できる地点である。

位置は日向国府跡指定地中心から375m北側にあたり、やや離れているが、同時期の遺構の広がりを押さえることで国府域の全体像がさらに明確になっていくものと考える。

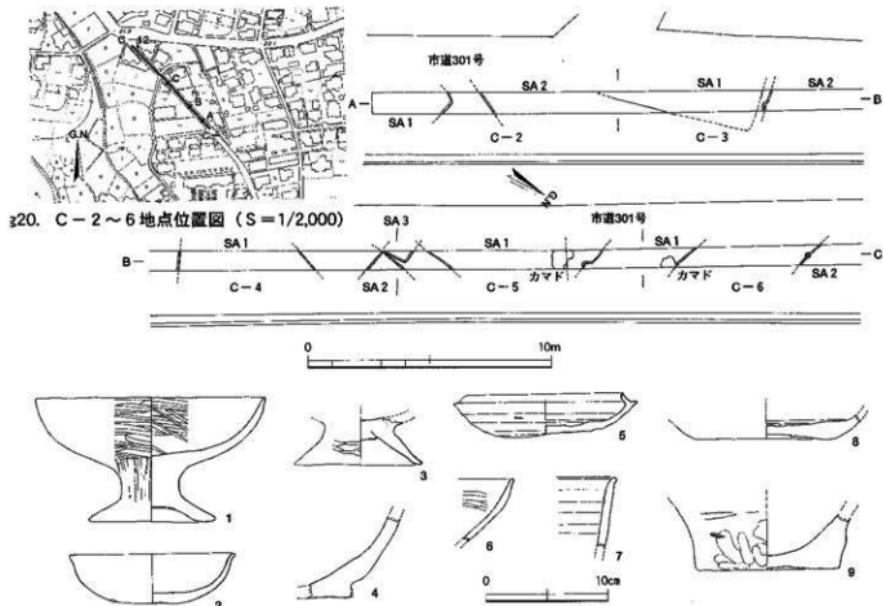


Fig21. C-2~6地点実測図・出土遺物実測図 (S=1/200, 1/4)

## 第Ⅳ章 小 結

1区：童子丸遺跡と石貫遺跡になる。1-1～8地点までは旧河道沿いにあたり、湿地帯であったと考えられ、黒色泥層が厚く堆積し、遺構はなかった。

2区：童子丸遺跡で2-8地点から12地点にかけて、竪穴住居跡、掘立柱建物の柱穴掘り方を検出した。遺構の時期は7世紀後半から9世紀後半の時期である。11地点のSA1はカマドをもち出土土器の特徴は、9世紀後半から10世紀初頭になるが、隣で検出したSA2は地床炉をもち、7世紀半ばにあたり、住居に複数の時期が認められる。調査地点の横の宅地内を平成13年度に試掘調査した際、8世紀代の竪穴住居跡を検出したことから、この付近には当該期の集落が継続し形成されたものと考えられる。

A区：童子丸遺跡と法元遺跡にあたる。市道291号を挟んで向かいになるA-4・5・7地点で竪穴住居跡を検出した。A-4地点で検出した溝状遺構の時期は8世紀代である。A-5地点は7世紀に遡る可能性がある。昨年度の調査でこの向かい側の16-B-4地点で6世紀末から7世紀前半の竪穴住居跡を検出したことからやや古い時期の集落が形成されていた可能性がある。

B-22～28地点：竪穴住居跡が検出できた。22地点では住居内から小型丸底壺や複合II縁壺破片、高壺破片が出土し、4世紀後半に位置づけられる。周辺では昭和63年度に酒元遺跡が発掘調査され、高壺が多く出土する5世紀代の竪穴住居跡が調査されているため<sup>(22)</sup>当該期の集落が広がっているものと推測できる。出土土器が祭祀的様相を持つ点が注目できる。隣接して検出した掘り方や25地点では9世紀後半から10世紀前半、26地点では7世紀後半と考えられる住居跡が検出できたため、複数の時期で集落として土地が利用されたことが分かる。  
(文責 津曲)

1区：1区では、竪穴住居跡と掘方底面に配石が施された土壙墓を検出した。竪穴住居跡は7世紀のもので、土壙墓は遺物がほとんど出土しておらず、不明な点が多いが、これまでに検出例のないもので、炭化物を多量に含む層が確認されたことによる火葬との関連性等を考えるうえでは注目される資料である。

3区：3区の調査では、竪穴住居跡を検出した。竪穴住居跡は、共伴遺物から7世紀のものと推定される。

B区：B区では竪穴住居跡と二重周溝を有する消失円墳等を検出した。特に、6・7地点から検出した二重周溝を有する消失円墳は、北側のわずかな部分であったが、確実に特定できたことは大きな成果である。残念ながら中央及び南側部分は対象外であり、規模等についてははっきりしない。

C区：C区では市道301号の2～9地点を中心に、そこから枝分かれしたB区の里道（2～5地点）、C区の南側3区（市道309号）等から多くの竪穴住居跡を重複して検出している。埋甕を有するものとカマドを有するもの等があり、時期は6世紀末から7世紀のものと推定される。本地域の南側一帯にも昨年度の調査で7世紀から9世紀にかけての竪穴住居跡を多数確認しており、かなり広い範囲に集落跡が存在していたと想定できる。  
(文責 薩方)

### 註

(1) 笠瀬明宏 他編「堂ヶ嶋第2遺跡」「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集」2003

(2) 西都市教育委員会編「酒元遺跡」「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集」1989



1. 1-8 地点



2. 1-14 地点土壤墓



3. 2-9 地点据削状况



4. 2-9 地点柱穴掘方



5. 2-10 地点 SA 檢出状況



7. 2-10 地点据削状況



6. 2-10 地点土層図

PL. 2



1. 2-11地点SA 2



2. 2-11地点SA 2 土器埋設炉



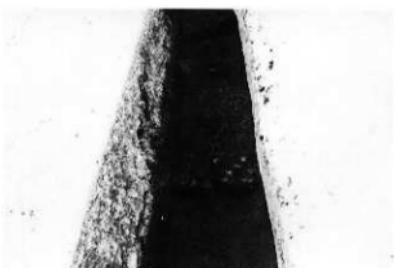
3. 2-11地点SA 1 カマド跡



4. 2-35地点溝状遺構検出状況



5. 2-35地点溝状遺構



6. B-22地点SA 1 土器出土状況



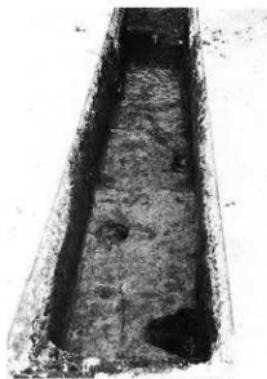
7. B-26地点SA 1



8. B-26地点カマド跡



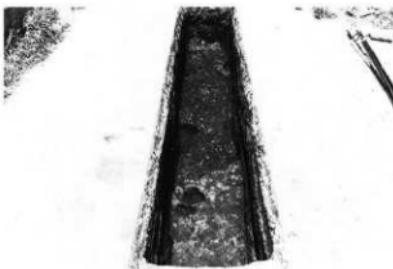
1. 3-1~7地点遺構掘削前状況



2. 3-3地点遺構検出状況



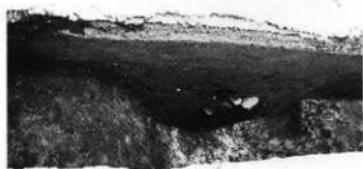
3. 3-6地点出土物状況



4. 3-7地点遺構検出状況



5. 3-7地点埋蔵検出状況



6. B-7地点消失円溝周溝土層



7. B-6地点消失円溝  
周溝検出状況（内側）



8. B-6+7地点消失円溝  
周溝検出状況



1. B - 3 地点遺構検出状況



2. B - 4 地点遺構検出状況



3. C - 1~12地点遺構掘削前状況



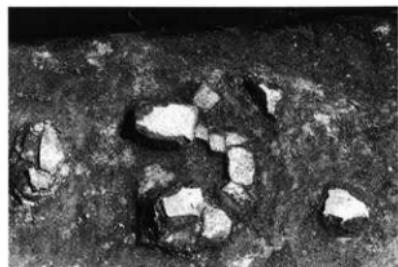
4. C - 2 地点遺物出土状況



5. C - 4 地点遺構検出状況



7. C - 5 地点遺構検出状況



6. C - 4 地点遺物出土状況



8. C - 5 地点遺構・遺物出土状況

## 報告書抄録

ふりがな	どうがしま かみつま ほうが どうじまる いしづき				
書名	堂ヶ鷲遺跡、上妻遺跡、法元遺跡、童子丸遺跡、石貫遺跡				
副書名	妻北地区下水道敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ				
巻次	第2集				
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	第47集				
編著者名	蓑方政幾、津曲大祐				
編集機関	西都市教育委員会				
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111				
発行年月日	西暦 2006年3月20日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間
堂ヶ鷲遺跡	宮崎県西都市大字右松字剣田 外	1016	日本測地系 32° 07' 15" 1240	日本測地系 131° 24' 29" 0191	20050701
上妻遺跡		1018	32° 06' 55" 7748	131° 23' 46" 9638	
法元遺跡		1020	世界測地系 32° 07' 27" 5614	世界測地系 131° 24' 20" 4950	
童子丸遺跡		1021	32° 07' 08" 2133	131° 23' 38" 4432	20060213
石貫遺跡		1025			
調査原因	種別	主な時	主な遺構	主な遺物	特記事項
妻北地区下水道敷設事業に伴う発掘調査	散布地、集落跡	古墳時代 後期・奈良・平安	消失古墳周溝、竪穴住居跡、溝状遺構	土師器・石鍤・須恵器・磁器	
調査面積	試掘調査			本発掘調査	
				2629.5m <sup>2</sup>	

---

---

西都市埋蔵文化財発掘調査 第47集

堂ヶ嶋遺跡・上妻遺跡・法元遺跡  
童子丸遺跡・石貫遺跡

平成18年3月20日発行

編集発行 西都市教育委員会

印 刷 イ マ イ 印 刷

---

---

